論　文

映画『梁山伯与祝英台』を漢文教材にする

湯　城　吉　信（大東文化大学文学部）

Using the movie *Liang Shanbo and Zhu Yingtai* as classical Chinese teaching materials

Yoshinobu YUKI

はじめに

本稿では、一九六三年の映画『梁山伯与祝英台』（梁山伯と祝英台）を漢文教材として提案したい。

『梁山伯与祝英台』は、『白蛇伝』『孟姜女』『牛郎織女』とともに、中国四大民間伝説の一つとされる。たびたび映画化もされている（注1）が、本稿で取り上げる映画はその中でも特に人気を博した。この映画は、黄梅調映画と呼ばれる中国風ミュージカルで、その歌は文語調でありながら通俗的でわかりやすい。日本の伝統音楽、文芸の要素が演歌に凝縮しているように、中国の音楽、文芸が最大公約数的に凝縮されていると言える。本稿で漢文教材として同作品を提案する理由は、わかりやすい漢文教材になると考えるからである。

一　黄梅調映画『梁山伯与祝英台』（一九六三年）について

黄梅調映画とは、湖北省の採茶劇にルーツを持ち、直接的には安徽省の黄梅劇が発展したものである。北京の京劇や浙江省の越劇の要素も吸収して発展し、一九五〇年代以降、中国本土の映画人がこれらの地方劇の演目を映画化したものが初期の黄梅調映画である。今日一般に言われる黄

梅調映画とは、それらが香港へ流入し、現地映画人が広東省の粤劇の要素を加えたもののことで、広東オペラとも呼ばれる映画ジャンルのことである。端的に言えば、一種の歌劇（ミュージカル）であると言える。

この黄梅調映画の巨匠とされるのが、一九五〇～七〇年代、香港最大手映画スタジオの邵氏製片廠（ショウ・ブラザーズ）に在籍した李翰祥である。一九五八年に彼が撮った『貂蝉』は香港最初の黄梅調映画であり、翌年、同じく李翰祥による『江山美人』によって黄梅調映画は最盛期を迎える。

一九六三年、この動きに乗じたのが、当時、邵氏製片廠のライバル・スタジオであった電影懋業公司（国泰・キャセイ）である。一九五四年に上海で映画化され、香港でも人気のあった中国の民承説話でもある『梁山伯与祝英台』をリメイクすることを発表すると、邵氏製片廠はこれに真正面から競合する。こうして撮影されたのが本稿で取り上げる『梁山伯与祝英台』（梁山伯と祝英台）である（監督は李翰祥）。

物語は、祝家の一人娘・英台と梁家の書生・山伯の恋物語である。王道とも言える「報われぬ恋路」を描いたもので、中国版『ロミオとジュリエット』とも言われる。英台は楽蒂という女優が、山伯は凌波というこれも女優が演じた。楽蒂の歌は吹替えだが、凌波は本人が歌っている。古典美人と言われた楽蒂の魅力に美しい歌や画面（セット）の魅力も加わり、台湾など中華圏で大ヒットした（注2）。

この映画中の歌は、メロディはほぼ一定しており、だいたいは七言四句がまとまりになっている。ほぼ填詞のようなものだと言えそうである。その文句は七言の調子に慣れるのに格好の教材となる。以下、物語をたどりつつ、漢文教材にできそうな原文を紹介していきたい。

二　『梁山伯与祝英台』のあらすじおよび教材にできそうな原文

（一）「英台別家*」（英台　家に別る）―英台の望み　＊参考文献Cでの題名。以下同様。

冒頭、祝英台が屋敷でため息をつく様子が映し出される。その時の歌：

「祝英台在閨房、無情無緒意彷徨。眼看学子求師去、面対詩書暗自傷。」

【訓読】祝英台は閨房に在りて、情無く緒無く意は彷徨す。眼に学子の師を求めて去るを看、面は詩書に対して暗（ひそ）かに自ら傷む。

【大意】祝英台は寝室で、気もそぞろ。少年達が学びに行くのを見て、書物を見てはため息をついていた。

英台は計を巡らす。仮病を託った後、男装して医者に化けて（注3）父母と面会し、娘の心の病を直すには男装させて学校に行かせるしかないと言う。さらに、「男装を見破れなかったら娘を行かせる」という約束を取り付けた後、自らの素性を明かす。だまされた父母はやむなく英台の杭州の学校への旅立ちを認める。

（二）「**柳蔭結拝**」（**柳蔭にて結拝す（＊兄弟の契りを結ぶこと）**）―**杭州へ**

場面は、のどかな郊外。召使とともに、意気揚々と杭州に向かう梁山伯が映し出される。その時の情景描写の歌：

「**遠山含笑、春水緑波映小橋。行人来往陽関道、酒簾高掛紅杏梢。緑蔭深処聞啼鳥、柳糸不住随風飄。**」

【訓読】遠山　笑を含み、春水の緑波　小橋に映ず。行人は陽関＊の道に来往し、酒簾は紅杏の梢に高く掛る。緑蔭の深き処に啼鳥を聞き、柳糸は住（とどま）らず風に随ひて飄ふ。

＊陽関道は大通り、出世街道。

【大意】遠山は微笑み、春の川の緑の波は小橋に映る。通行人は意気揚々と歩み、飲み屋の暖簾が杏の梢で靡く。緑の木陰の奥で鳥が啼き、柳の枝はずっと風にそよいでいる。

召使が「道連れがほしいですね」と言っているところに、祝英台とその召使が現れる。ともに杭州の学校に行く途中だと知った二人は会話を始める。

梁山伯「**我们**中途相逢、真是三生有幸。」（途中でお知り合いになれるとは、この上ない幸せです。）

英台が「仁兄有所不知」（ご存じないでしょうから）と前置きして妹のこと（その実自分のこと）を語り出す。その時の歌：

「**家中小妹志高強、要与男児争短長。脂粉不需需筆墨、釵鈿不愛愛文章。一心随我杭城去、兄妹双双共学堂。無奈爹爹頭脳旧、女児不許出閨房。**」

【訓読】家中の小妹　志高強にして、男児と短長を争ふを要（もと）む。脂粉は需（もと）めず筆墨を需（もと）め、釵鈿は愛せず文章を愛す。一心に我に随ひて杭城に去り、兄妹双双（ともども）学堂を共にせんとす。奈（いかん）ともする無し　爹爹（たた）頭脳旧く、女児の閨房を出づるを許さざるを。

【大意】我が家の妹は志が高く、男子と競おうとしています。白粉ではなく文房具を欲しがり、簪よりも文章が好きです。私とともに杭州に行き、共に学校で学びたがったのですが、父の頭が堅く、家を出ることを許されなかったのです。

それに対する梁山伯の返し：

「**天生男女本公平、人世荒唐不近情。…**」

【訓読】 天生　男女本公平なるに、人世荒唐にして情に近からず。…

【大意】 本来、男女は公平であるはずなのに、人の世は何と無茶苦茶なことだ。…

意気投合した二人は義兄弟の契りを果たす。その時の山伯の台詞：

「**無兄無弟感孤単、水遠山長行路難。如蒙兄長不嫌棄、与君結義訂金蘭。**」

【訓読】 兄無く弟無く孤単に感じ、水遠く山長く行路難（かた）し。如（も）し兄長が嫌棄せざるを蒙れば、君と義を結びて金蘭を訂（さだ）めん。

【大意】 兄弟もなく孤独に思い、遠い道のりで行くのも簡単ではありません。あなたがお認めくださるなら、金蘭の契りを結びましょう。

それに対する英台の返し：

「**求師同是別家園、萍水相逢信有縁。従此書窓得良友、如兄如弟共鑽研。**」

【訓読】 師を求め同じく是れ家園に別れ、萍水相逢ふは信（まこと）に縁有り。此より書窓に良友を得、兄の如く弟の如く共に鑽研せん。

【大意】 師を求め共に故郷を離れ、浮き草が巡り会えたのもご縁でしょう。今後、書窓に良友を得て、実の兄弟のように共に研鑽を積みましょう。（注4）

時に、英台は数えで十六歳、山伯は十七歳であった。

（三）「**書館談心**」（**書館にて心を談ず**）―**杭州の学校での様子**

場面は、杭州の学校。大勢の学生が書物を念じている。その様子を描写する歌：

「**子曰詩云朗朗読、磨穿鉄硯用功夫。従此了却英台願、良師益友共一炉。**」

【訓読】 子曰く、詩云ふ、朗朗と読み、鉄硯をも磨き穿ち功夫を用ふ。此より英台が願ひを了却し、良師益友　一炉を共にす。

【大意】「子曰く」「『詩経』に云う」と声を上げて朗読し、硯に穴が開くほど勉強する。英台は宿願を果たし、良き教師・良き友と生活を共にした。

続いて、学校での授業の様子が描写される。この場面は経書の文句の羅列であり、一般学生に対する漢文教育では取り上げるべきではないだろう。ただ、経書の暗誦を中心する旧時の学校の勉強の様子を彷彿とさせる点において、中国学、特に思想を専門とする学生にとっては興味深い教材になると思うので、以下、参考までに挙げておく（煩瑣になるので経書の内容は解説しない）（注5）。

まず、学校の学生たちは経書（四書の一つである『大学』）の文句をメロディをつけて歌う。

学生：「大学之道、在明明徳、在親民、在止于至善。知之而後有定、定而後能静、静而後能安、安而後能慮、慮而後能得。」

次に、教師が言った経書の文句の続きを学生が継いでいく練習がされる。

教師：古之欲明明徳於天下者、
学生：先治其国。
教師：欲治其国者、
学生：先斉其家。
教師：欲斉其家者、
学生：先修其身。

その次には、個々の学生を指名して、経書を覚えているかどうかが試される。

教師：子曰学而時習之、不亦説乎。（『論語』学而篇）
指名された学生：有朋自遠方来、不亦楽乎。
教師：関関雎鳩、在河之洲。（『詩経』国風）
英台：窈窕淑女、君子好逑。（＊ここは、二人の恋を暗示するのであろう）
教師：唯女子与小人為難養也。（『論語』陽貨篇）
梁山伯：近之則不遜、遠之則怨。

続いて、教師が居眠りしている学生を諭すべく、「子曰飽食終日」（『論語』陽貨篇にあり「一日中飽食にふけっていると」の意。続きは「無所用心、難矣哉。（始末に終えない）」）と投げかけると、居眠りしていた学生は、「飽食終日」を繰り返した挙げ句、「不餓了」（腹いっぱいだ）と言って皆の笑いを誘う。教師が「真是朽木不可雕也」（『論語』公冶長篇にあり「腐った木は彫刻しようがない」の意。昼寝していた宰予に孔子が言ったことば）とまたも『論語』の語を投げかけると、居眠りしていた学生は、得意げに「糞土之牆不可杇也」（ぼろ土は塗り固められない）と正しく続け、さらに笑いを誘う。

授業後、「唯女子与小人為難養也。近之則不遜、遠之則怨。」（女子は養いにくい）に納得できないと不機嫌な英台に対して、山伯は、「自古道女人是禍水。…自古以来、為女人而亡国的不少」（昔から女は禍の元と言う。…女性のために国を滅ぼした例も少なくない）と言い、夏の桀王以下、女性のために国を滅ぼした例を列挙し、「聖人之言伝後代、仔細想、再思裁。為兄之言、該不該。」（今に伝わる聖人の言はその意味を熟考すべきだ。そうだろう。）と聞く。

それに対して、英台は、「古来多少女賢才」（昔から才女は多いでしょう）と言い、女媧が天を補った話から孟母三遷まで、女性が活躍した例を列挙して反駁し、「兄読書不求甚解、是非黒白分不開。小弟之言休見怪、堪笑**你**是小書呆。」（お兄さんは読書しても十分に理解しようとせずに、是非の判断もできていません。失礼を恐れずに申しますが、あなたは頭でっかちの書生ですよ。）と締めくくる。

それに対する山伯の台詞：

「茅塞頓開、賢弟胸中有大才。愚兄我一知半解、論文章不及賢弟台。従今後、苦琢磨、不懈怠。書中之言応分解。」

（目から鱗が落ちました。あなたは本当に賢いですね。私は生半可な理解で到底あなたに及びません。今後はもっと努力しましょう。本の中の言葉はちゃんと理解するようにすべきですね。）

その後、英台は山伯に女だと悟られそうになることもあるが、何とか切り抜ける。

（四）「十八相送」（十八　相送る）—山伯、英台を送る　＊十八は十八里。二人が出会った場所（長亭）までの距離。

やがて三年が経ち、英台は故郷に帰ることになる。その時の情景描写の歌：

「光陰如箭似水来、匆匆過了三載長。梁山伯、祝英台、情重如山深如海。一箇是説古論今言不断、一箇是嘘寒問暖口常開（一人は常に相手のことを思いやっている。：英台のこと）**。転眼三年容易過、匆匆春去春又来。」**

【訓読】 光陰箭（や）の如く水の来たるに似、匆匆として三載の長きを過了す。梁山伯、祝英台は、情の重きこと山の如く深きこと海の如し。一箇は是れ古を説き今を論じ言断（た）へず、一箇は是れ寒きを嘘（ふ）き暖きを問ひ口常に開く。眼を転ずるに三年容易に過ぎ、匆匆として春去り春又た来たる。

【大意】 時間が経つのは矢の如くまた流れる水の如く、あっという間に三年が過ぎた。梁山伯と祝英台は深い情で結ばれ、一人（山伯）は古今を論じてやまず、一人（英台）は常に相手のことを思いやっていた。あっという間に三年が過ぎて、また春がやってきた。

英台は教師の妻に別れの挨拶に伺う。その時の英台の歌：

「**老師教誨恩如海、師母栽培徳似山。自与梁兄同受業、春花秋月已三年。…**」

【訓読】 老師の教誨　恩は海の如く、師母の栽培　徳は山に似たり。梁兄と同じく業を受けてより、春花秋月　已（すで）に三年。…

【大意】 先生の教育の恩は海のように深く、先生の奥様の指導の徳は山のように高かったです。梁さんといっしょに学業を授かってから、もう三年経ちました。…

「私は女でした」（英台原是喬装扮）と打ち明ける英台に対して、教師の妻は「とっくに知っていたわ」（師母眼中早看穿）と言う。それを聞いて英台は自分の思いを打ち明ける。

「**既是師母早看穿、英台不復顧羞慚。千言万語説不尽、取出懐中白玉環、交与梁兄為信物、万望成全好姻縁。**」

【訓読】 既に是れ師母早くに看穿（うが）てば、英台は復た羞慚を顧みず。千言万語説きて尽くさず、懐中の白玉の環を取出し、梁兄に交（かは）し与（あた）へて信物と為し、万（ひたす）ら好き姻縁の成全するを望む。

【大意】 お見通しなら恥ずかしがらずに申します。言葉では尽くせないのでこの白玉のアクセサリーを誓いの物として、二人が結ばれることを願います。

それに対する教師の妻の返し：

「**英台貌与花相似、山伯才同錦一般。如此良縁誰不願、師母更心歓。定会替你成全好姻縁。**」

【訓読】 英台が貌は花と相似、山伯の才は錦と同じく一般。此くの如き良縁　誰か願はざらん、師母は更に心歓ぶ。定めて会（かなら）ず**你**（なんぢ）に替はりて好き姻縁を成全せん。

【大意】 英台の容貌は花のようで、山伯の才能は錦のよう。このような良縁を願わない人はいないでしょう。必ずお手伝いさせていただくわ。

英台故郷の日、山伯は途中まで見送る。

英台は、見る物につけ、男女の仲に結び付けて自分の気持ちを伝えようとする。だが、英台が男だと信じて疑わない山伯は一々理解できずにかえって腹を立てたりする。ここで繰り返されるやり取りは、結ばれそうで結ばれない二人を象徴している。全編の見どころの一つと言えよう。

その一場面。

情景描写：「過了一山又一山、前行到了鳳凰山」

【訓読】 一山を過了すれば又た一山、前行して鳳凰山に到了す。

【大意】 いく山も越えて、二人は鳳凰山*（＊二人を暗示）にたどり着いた。

そこでの二人の掛け合い。

英台：**鳳凰山上花開遍、**

【訓読】 鳳凰山上　花開くこと遍く、

【大意】 鳳凰山の上は花盛りだが、

山伯：**可惜中間缺牡丹。**

【訓読】 惜しむべし、中間牡丹を缺くを。

【大意】 ただ牡丹に花がないことが残念だ。

英台：**牡丹花、你愛它、我家園裏牡丹好、要摘牡丹上我家。**

【訓読】 ：牡丹の花、**你**（なんぢ）　**它**を愛せば、我家の園裏　牡丹好し、牡丹を摘まんと要（もと）むれば我が家に上れ。

【大意】 牡丹がお好きなら、我が家にありますので摘みに来て下さい。

山伯：**牡丹花、我愛它、山重水復路遥遠、怎能為花到你家呀。**

【訓読】 牡丹の花、我　**它**を愛するも、山重なり水復（かさ）なり路遥遠なり、**怎**（いか）んぞ能く花の為に**你**が家に到らんや。

【大意】 牡丹は好きだが、遠すぎて（＊二人の仲を暗示）摘みになど行けない。

英台：**有花堪折直須折、莫待無花惹心煩。**

【訓読】 花の折るに堪（た）ふる有れば直（た）だ須（すべから）く折るべし、花無く心煩を惹（まね）く待つ莫かれ。
【大意】 摘める花があるならすぐ摘むべきです（＊自分を暗示）。花がなくなって後悔しないようにしてください（＊山伯に後悔するなと暗示）。

そのようなやり取りを繰り返した二人であったが、やがて別れの時が来る（場所は二人の出会いの場所である）。

英台：**労君遠送感情深、到此分離欲断魂。一事在心臨別問、問梁兄可有意中人。**
【訓読】 君を労（わづら）はせ遠く送り感情深し、此に到り分離するに魂を断たんと欲す。一事心に在り臨別に問ふ、問ふ梁兄意中の人有るべきや。
【大意】 わざわざここまで送って下さってありがとうございます。ここでお別れするのは断腸の思いです。一つだけお伺いしたいのですが、お兄さんは意中の方がおられますか。

山伯：**愚兄生長在貧門、無勢無財怎訂婚。学業未成名未就、一時那有意中人。**
【訓読】 愚兄生長すること貧門に在り、勢無く財無く怎（いか）んぞ訂婚せん。学業未だ成らず名未だ就かず、一時那（いか）んぞ意中の人有らん。
【大意】 私は貧乏で婚約などできません。学業も成っていないのに、どうして意中の人などいましょうか。

英台：**聞説梁兄未訂婚、英台有妹守閨門。梁兄如有求凰意、有我為媒事可成。**
【訓読】 梁兄未だ訂婚せずと説くを聞くに、英台妹有り閨門を守る。梁兄如（も）し凰を求むる意有れば、我有り媒と為り事成すべし。
【大意】 それなら、私には妹がいます。もしよろしければ、私が仲人になりましょう。

山伯：**路遠無縁見玉人、青春美貌定無論。**
【訓読】 路遠く玉人を見るに縁無きも、青春の美貌　定めて論ずる無し。
【大意】 お顔を拝見できませんが、美しいことは確かでしょう。

英台：**問人与我無差異、問貌教人両不分。**
【訓読】 ：人を問へば我と差異無く、貌を問へば人をして両つながら分けざら教（し）む。
【大意】 人となりも私のようで、見た目も区別がつかないほどです。

「そうか。途中の思わせぶりな会話はこのことを言っていたんだな（無怪出言多比喩、原来一味想聯婚）」と納得する山伯。
「なるべく早くに迎えに来てくださいよ（莫忘了求親早到祝家村）」と念を押す英台。（ちなみに、横では召使い同士も別れを惜しんでいる。）そ

の様子を描写する

「**臨別依依難分開、含悲忍泪祝英台、心中想説千句話、万望梁兄早点来。**」

【訓読】 別れに臨みて依依として分開し難く、悲しみを含み泪を忍ぶ祝英台。心中　千句の話を説かんと想ひ、万（ひたす）ら梁兄の早点（早く）来るを望む。

【大意】 別れに臨んで名残惜しく、悲しみ涙を浮かべる祝英台。言いたいことは山ほどあるが、ただひたすら早く山伯が来ることを望む。

（五）「祝父托媒」（祝が父　媒を托す）―望まぬ婚約

学校では、教師の妻が山伯に英台は女だと教えて、白玉のアクセサリーを渡し、英台の気持ちを伝え、求婚しに行かせる。山伯は、以前、見送りの途中での英台の謎かけの意味を反芻しながら、意気揚々と英台の家に向かう。

一方、英台の家では、山伯が求婚しに来る前に、太守の子で遊び人の馬文才が求婚し、父親が承諾していた。英台は嫌がるがどうしようもない。権勢があることに加え、親は娘が婚姻を決めるなどあり得ないと言うからである。怒った時、父親が言う台詞は以下の様である。

「不聴父命就是不孝。」

【訓読】 父が命を聴かざるは、就（すなは）ち是れ不孝。

【大意】 父の命令を聞かないのは親不孝だ。

「焉有終生不嫁之理。」

【訓読】 焉んぞ終生嫁せざるの理有らん。

【大意】 どうして一生嫁がないことなどあろう。

「従也要従、不従也要従。」

【訓読】 従ふも也（ま）た従ふを要す、従はざるも也（ま）た従ふを要す。

【大意】 従わないと言っても従わせてやる。

感情が高ぶった英台は慟哭し、次のような歌を歌う。

「**我寒梅豈怕風雪圧、鳳凰怎肯配烏鴉。無論他馬家権勢有多大、要成親除非是日出西山、鉄樹開花。**」

【訓読】我は寒梅なり、豈に風雪の圧を怕（おそ）れん、鳳凰怎（いか）んぞ烏鴉に配するを肯（がへん）ぜん。他（か）の馬家が権勢　多大有るを論ずる無く、親を成すを要（もと）むるは、除非（ただ）是れ日西山に出、鉄樹に開花するのみなり。

【大意】私は逆境にも立ち向かいます。どうして鳳凰が烏に嫁ぐことができましょう。馬家がどれほど権勢があろうとも、嫁ぐことは、太陽が西から昇り、鉄の木に花が咲きでもしない限り、絶対にあり得ないことです。

（六）「楼台会」（楼台の会）―悲劇の再会

やがて、山伯が英台の屋敷に求婚しに来る。英台に面会した山伯は次のように歌う。

「**梁山伯与祝英台、天公有意巧安排。美満姻縁償夙願、今生今世不分開。**」

【訓読】梁山伯と祝英台と、天公　意有り巧みに安排す。美満なる姻縁　夙願を償ひ、今生今世　分開せず。

【大意】梁山伯と祝英台は天の采配というべき理想的な組み合わせ。この良き縁談を実現し、一生添い遂げるのだ。

それに対し、英台は「どうしようもなかったんです。父が私を…」（無奈是爹爹已将我終身…）と言うと、部屋に逃げる（她終身二字方離口、含悲忍涙進秀房）。

山伯「約束を破る気なら、どうして別れの時に自分から結婚の話をしたんだ」（既是有心毀旧約、臨行何必自為媒）と怒るが、どうしようもないことを知り泣き崩れる。

最後に二人は別れの杯を交わす。「わざわざお越し下さったのに、お慰めする言葉もありません。せめてお酒を一杯つがせてください」（梁兄特地到寒舎、小妹無言可安慰、親斟薄酒敬梁兄）と言う英台に対し、意気消沈した山伯は「まさか、わざわざやってきて、この酒を飲むだけになろうとは思わなかった」（想不到我特来叨擾酒一杯）と言って酒を飲み干す。それに対して、英台は以下のような歌を歌う。

「**草橋相遭便相親、同学三載更有情。留下玉環為信物、相煩師母説婚姻。臨行送我銭塘路、幾度忘羞露本心。…豈知好事成虚話、棒打鴛鴦両離分。爹爹許了馬家婚。心已砕、意難伸、尚有何言対故人。**」

【訓読】草橋にて相ひ遭ひ便ち相ひ親しみ、同学三載更に情有り。玉環を留下して信物と為し、師母を相ひ煩はせて婚姻を説かす。行くに臨みて我を銭塘路に送り、幾度も羞（はぢ）を忘れて本心を露はす。…豈に知らん好事虚話と為り、鴛鴦を棒打し両つに離分し、爹爹馬家に婚を許し了（おは）り、心已に砕け、意伸び難く、尚ほ何の言か有りて故人に対さん。

【大意】 草橋で巡り合ってすぐに意気投合し、三年間いっしょに学んでさらに情が深まりました。玉のアクセサリーを誓いの物とし、先生の奥様を煩わせて婚姻の仲立ちをしてもらいました。出発の際にはは銭塘の道まで送っていただき、幾度も恥を忘れて本心を吐露しました（＊見る物にかこつけて自分の思いを述べたこと）。…このようなすばらしい話が幻となり、つがいの鴛鴦が二つに割かれようとは誰が知り得たでしょう。父は馬家と婚約を結びました。心は砕け、気持ちは鬱屈し、愛しい人に申し上げることばもありません。

二人は最後に「生不成双死不分」（生きている時は添い遂げられなくても死んでも離れない）と言って抱き合う。

（七）「山伯臨終」（山伯の臨終）（九）「祭墳・化蝶」（墳を祭る・蝶に化す）

間もなく山伯は病気になり亡くなる。

英台は嫁に行く条件として、途中、山伯の墓に参ることを要求する。その時の英台の歌。（映画の歌は長いので、ここでは参考文献Cの歌を引用する。）

「**三尺孤墳土未乾、可憐幽恨已埋蔵。英台不是無情女、今日親来哭祭郎。**」

【訓読】 三尺孤墳　土未だ乾かざるに、憐むべし　幽恨已（すで）に埋蔵さるるを。英台は是れ無情の女ならず、今日親（みづか）ら来たりて郎を哭祭す。

【大意】 三尺の墓の土はまだ乾いていないのに、恨めしい思いはすでに埋められてしまった。私は無情な女ではありません。今日、自らお参りに来ましたよ。

「不能同生求同死」（いっしょに生きられないのならいっしょに死にましょう）と英台が泣くと、嵐が起き墓が割れる。そこに英台が飛び込むと、二匹の蝶が飛び立ち天に昇る。かくて、二人は「生不成双死不分」（生きている時は添い遂げられなくても死んでいっしょになる）（注6）という別れの時のことばを実現するのである。

最後の歌「**彩虹万里百花開、胡蝶双双対対来。地老天荒心不変、梁山伯与祝英台。**」（注7）

【訓読】 彩虹万里　百花開き、胡蝶双双　対対来たる。地老ひ天荒れるとも心変はらず、梁山伯と祝英台と。

【大意】 空に大きく虹が架かり百花が咲く中、蝴蝶が並んで飛んでいく。たとえ何万年経とうともこの心は変わらない。梁山伯と祝英台。

図　張恨水著『梁山伯与祝英台』表紙（任遜画）
（香港：文宗出版社、一九五四年）
＊蝶を追いかける女性は、英台の召使いの銀心。

おわりに

以上のように、『梁山伯与祝英台』は添い遂げられない恋（心中）という古い題材を扱った話ではあるが、本稿で扱った映画では、自分の道を切り開き結婚相手を見つけようとする女性の主体性を強調している点、制作期の時代の反映が見られる。

白話表現も混じっているので、漢文教材としてやや扱いにくい面もあるが、典型的な言い回しが多いので、漢文、中国語の基礎を学ぶ教材として適しているのではないだろうか。

注

（1）例えば、一九五四年、上海電影製片廠の越劇版（監督：桑弧・黄沙、梁山伯：范瑞娟、祝英台：袁雪芬）がある（華東戯曲研究院舞台劇本を改編したものという）。歌は、本稿で採用した一九六三年版同様、七言詩になっているので、比べてみるのもおもしろい（ただより白話的である）。最近でも、一九九四年制作の香港映画「梁祝（The Lovers、日本名バタフライラバーズ」や二〇〇八年制作の「剣蝶―武侠梁祝（Assassin's Blade、日本名バタフライラバーズ）」がある。

（2）以上の内容は、以下の文献・サイトを参照した。

方保羅編著『図説香港電影史―1920-1970』（香港・三聯書店、一九九七年）

中国電影資料館編『1913-1997 香港電影図志』（浙江撮影出版社、一九九八年）

中国電影図史編輯委員会編『中国電影図史―1905-2005』（中国伝媒大学出版社、二〇〇七年）

「黄梅調映画の代表作」（lamlam_pachanga さん、二〇一〇年八月十一日二三時一四分公開）

http://movies.yahoo.co.jp/movie/%E6%A2%81%E5%B1%B1%E6%B3%8A%E3%81%A8%E7%A5%9D%E8%8B%B1%E5%8F%B0/53977/review/%E9%BB%84%E6%A2%85%E8%AA%BF%E6%98%A0%E7%94%BB%E3%81%AE%E4%BB%A3%E8%A1%A8%E4%BD%9C/1/

（3）参考文献B、Cや五四年の同名映画では占い師となっている。本映画では現代的に医者としたのであろう。

（4）参考文献Ｉでは、義兄弟となる場面のやりとりとして、梁山伯が「柳下双双斉跪倒」（柳の下でともに跪き）と言うと、祝英台が「金蘭結拝勝同胞」（金蘭の契りは肉親にも勝る）と続け、さらに梁が「弟兄彼此無分異」（兄弟として今後は分け隔てなく）と言うと、祝英台が「苦楽相同生死交」（苦楽を共にしましょう）と結んでいる。

（5）五四年版の映画では、授業の様子の描写はない。参考文献Cではあるが、女子に関わる部分は、授業での教師と英台らのやりとりになっている。本映画と参考文献Cの授業の描写の違いを比較するのもよいだろう。参考文献Ｉでは、学校は周世章書館と言い、学生は六人で寄宿しているのは梁山伯と祝英台のみである。午前中に授業が行われ、一日と十五日に詩文の試験が行われる。例えば、教師が「緑葉紅花、能邀胡蝶」と言い、それの対句を作らせるなどである（「同窓」）。答えを求められた梁山伯が「金弓銀弾、要打鴛…」と言いかけると、祝英台が制して「莫打鴛鴦」と結ぶ（＊胡蝶、鴛鴦ともに二人を暗示する）。

（6）参考文献Cでは「生不同衾、死将同穴」（生きて床をいっしょにできなくても、死ねば同じ墓に入る）とある。ちなみに、以下の様に、墓ではなく棺が開いてそこに飛び込んで心中する話がある。

清・褚人穫『堅瓠餘集』巻四「華山畿君」（浙江人民出版社、一九八六年）

＊他、『清代筆記小説大観』（上海古籍出版社、二〇〇七年）二にも見える。

朱秉器『漫紀』、宋南徐有一士、従華山往雲陽、見客舎中一女、年可十八九、悦之無因、遂成心疾。母詢之、得其隠。往雲陽見此女、言及其故。女聞之、感慨不勝、因脱蔽膝、令母持帰、暗蔵病者蓆下、臥之得愈、数日果瘥。一日挙蓆見蔽膝、持而痛泣、気幾絶、嘱其母曰、「他日葬我、須従従雲陽過。」母如其言。比至女門、牛任鞭策不行、須臾女沐浴粧飾而出曰、「華山畿君、既因我死、我活為誰。君若見憐、棺木為我開裂。」言訖棺開、女遂投入、気即絶、因合葬焉、呼為神士冢。楽府有華山畿。本与梁山伯祝英台事同。

『楽府詩集』（郭茂倩、中華書局、一九九八年）巻四六所収『古今楽録』

「華山畿」者、宋少帝時懊悩一曲、亦変曲也。少帝時、南徐一士子、従華山畿往雲陽。見客舎有女子年十八九、悦之無因、遂感心疾。母問其故、具以啓母。母為至華山尋訪、見女具説聞感之因。脱蔽膝令母密置其席臥之。当已。少日果差。忽挙席見蔽膝而抱持、遂呑食而死。気欲絶、謂母曰、「葬時車載、従華山度。」母従其意。比至女門、牛不肯前、打拍不動。女曰、「且待須臾。」牀点沐浴、既而出。歌曰、「華山畿、君既為儂死、独活為誰施。歓若見憐時、棺木為儂開。」棺応声開、女透入棺、家人叩打、無如之何、乃合葬、呼曰神女冢。

【課題例】 上記、二つの話で違う点を述べよ。

（7）参考文献Cでは以下のようである。

「梁山伯与祝英台、永結同心解不開。縦是人間容未得、也応携手到蓬莱。」

【訓読】 梁山伯と祝英台と、永く同心を結び解き開かず。縦（たと）ひ是れ人間に容（ゆる）すを未だ得ざれども、也（ま）た応（まさ）に手を携へて蓬莱に到らん。

【大意】 梁山伯と祝英台の堅く結ばれた心は解くことができない。たとえこの世で添い遂げることができなくても手を携えて蓬莱山に上るであろう。

附録：古籍に見える「梁山伯と祝英台」（漢文教材に適していそうなものに限る。）

＊それぞれ表現に微妙な違いがあるので、比べながら読むと勉強になる。また、授業の方法として、いちばん簡潔な『宣室志』の話をまず読んで、その後に、特定の場面の映画の歌を読むのもよいのではないか（同じ題材で散文と韻文の両方ができる）。

清・瞿灝撰『通俗編』巻三七「故事」「梁山伯訪友」（唐・張読撰『宣室志』の引用）

英台、上虞祝氏女也。偽為男装游学、与会稽梁山伯者同肄業。山伯字処仁。祝先帰、二年、山伯訪之、**方知其為女子**、悵然如有所失。告其父母

求聘、而祝已字馬氏子矣。山伯後為鄞令、病死、葬鄮城西。祝適馬氏、舟過墓所、風濤不能進。**問知**有山伯墓、祝登号慟、地忽自裂陥、祝氏*遂並埋焉。晋丞相謝安奏表其墓曰義婦冢。

【訓読】祝英台、上虞祝氏の女なり。偽りて男装を為し游学し、会稽梁山伯なる者と同じく業を肄（なら）ふ。山伯字は処仁。祝先に帰り、二年にして、山伯之を訪れ、**方（はじ）めて其の女子為（た）るを知り**、悵然として失ふ所有るが如し。其の父母に告げて聘を求むるも、祝已（すで）に馬氏の子に字（＊許嫁になる）したり。山伯後に鄞令と為り、病死し、鄮城の西に葬らる。祝　馬氏に適（とつ）ぎ、舟墓所を過（よぐ）るに、風濤にて進む能はず。問ひて山伯の墓有るを知り、祝登りて号慟すれば、地忽ち自ら裂陥し、祝氏遂に並びに焉（ここ）に埋らる。晋丞相謝安　奏して其の墓を表して義婦冢と曰（い）ふ。

【校勘】○地忽自裂陥、祝氏　顔春峰点校『通俗編　附直語補証』（中華書局、二〇一三年）では「地忽自裂、陥祝氏」と切る。

【ポイント】「祝」が意味のある語だけに、姓の部分と混同しないよう注意する。

明・徐樹丕撰『識小録』巻三

梁山伯、祝英台、皆東晋人。梁家会稽、祝家上虞、同学於杭者三年、情好甚密。祝先帰。梁後過上虞尋訪、**始知為女子**。帰告父母、欲娶之。而祝已許馬氏子矣。梁悵然不楽、誓不復娶。後三年、梁為鄞令、病死、遺言葬清道山下。又明年、祝為父所逼、適馬氏、累欲求死。会過梁葬処、風波大作、舟不能進。祝乃造梁冢、失声哀慟。冢忽裂、祝投而死焉。冢復自合。馬氏聞其事於朝、太傅謝安請贈為義婦。和帝時、梁復顕霊異助戦伐。有司立廟於鄞県。廟前橘二株相抱。有**花蝴蝶**、橘蠹所化也、婦孺以梁称之。按、梁祝事異矣。『金楼子』及『会稽異聞』皆載之。夫女為男飾、乖矣。然始終不乱、終能不変、精誠之極、至于神異。宇宙間何所不有、未可以為誕。

【訓読】梁山伯、祝英台、皆な東晋の人なり。梁家は会稽に、祝家は上虞なり、同じく杭に学ぶこと三年、情好甚だ密なり。祝は先に帰る。梁は後に上虞を過（よぎ）りて尋訪し、**始めて女子為（た）るを知る**。帰りて父母に告げ、之を娶らんと欲す。而して祝已（すで）に馬氏の子に許せり。梁は悵然として楽まず、復（ま）た娶らざるを誓ふ。後三年、梁鄞令と為り、病死し、遺言して清道山の下に葬らる。又た明年、祝は父の逼る所と為り、馬氏に適（ゆ）き、累（しき）りに死を求めんと欲す。会（たま）たま梁が葬処を過（よぐ）るに、風波大ひに作（おこ）りて、舟進む能はず。祝乃ち梁が冢に造（いた）りて、声を失ひて哀慟す。冢忽ち裂け、祝投じて焉（ここ）に死せり。冢復た自ら合す。馬氏其の事を朝に聞（きこ）すに、太傅謝安贈りて義婦と為さんことを請ふ。和帝の時、梁復た霊異を顕し戦伐を助く。有司廟を鄞県に立つ。廟前の橘二株相ひ抱く。**花蝴蝶有り**、橘蠹の化する所なり、婦孺梁を以て之を称す。按ずるに、梁祝の事異（い）なり。『金楼子』及び『会稽異聞』皆な之を載す。夫れ女男飾を為すは、乖（あやま）れり。然れども始終乱れず、**終**に能く変らざ

るは、精誠の極みにして、神異に至る。宇宙の間、何ぞ有らざる所か、未だ以て誕と為すべからず。

【校勘】 参考文献Kの澤田瑞穂氏の訓読を参考にした。

【注目点】 蝶が登場する。

清・邵金彪撰『祝英台小伝』

祝英台、小字九娘、上虞富家女。生無兄弟、才貌双絶。父母欲為択偶、英台曰、「児出外求学、**得賢士事之耳**。」因易男装、改称九官。遇会稽梁山伯亦游学、遂与偕至**宜興善権寺**之碧鮮岩、筑庵読書、同居同宿。三年、而梁不知為女子。臨別梁、約曰、「某月日可相訪、将告母、以妹妻君。」実則以身許之也。**梁家貧、羞渋衍期**。父母以英台字馬氏子。後梁為鄞令、過祝家詢九官。家童曰、「吾家但有九娘、無九官。」**梁驚語**、以同学之誼乞一見。英台羅扇遮面、出身一揖而已。梁悔念而卒、遺言葬清道山下。明年、英台将帰馬氏、命舟子迂道過其処。至則風濤大作、舟遂停泊。英台乃造梁墓前、失声慟哭、地忽開裂、墜入**塋**中。綉裙綺襦、**化蝶**飛去。丞相謝安聞其事于朝、請封為義婦冢。此東晋永和時事也。斉和帝時、梁復顕霊異、助戦有功、有司為立廟于鄞、合祀梁祝。其読書宅称碧鮮庵。斉建元間、改為善権寺。今寺後有石刻、大書「祝英台読書処」。

【訓読】 祝英台、小字九娘、上虞富家の女なり。生れて兄弟無く、才貌双つながら絶す。父母為に偶を択ばんと欲すれども、英台曰く、「児の外に出でて学を求むるは、**賢士を之に事（つか）へんのみ**」と。因りて男装に易（か）へ、改めて九官と称す。遇（たま）たま（＊あるいは「…游学するに遇ひ」）会稽梁山伯も亦た游学し、遂に与偕（とも）に**宜興善権寺**の碧鮮岩に至り、庵を筑（きづ）きて読書し、同居同宿す。三年にして、梁女子為（た）るを知らず。梁に別るるに臨みて、約して曰く、「某月日相ひ訪ふべし、将に母に告げて妹を以て君に妻とせんとす」と。実は則ち身を以て之に許すなり。**梁家貧しく、羞渋して衍期す**。父母英台を以て馬氏が子に字す。後梁鄞令と為り、祝が家を過（よぎ）りて九官を詢（と）ふ。家童曰く、「吾が家但だ九娘有るのみにして、九官無し」と。**梁驚き語り**、同学の誼みを以て一見を乞ふ。英台羅扇もて面を遮り、身を出づるも一揖するのみ。梁悔念して卒（しゅっ）し、遺言して清道山の下に葬らる。明年、英台将に馬氏に帰（とつ）がんとし、舟子に命じて迂道して其の処を過ぐ。至れば則ち風濤大ひに作（おこ）り、舟遂に停泊す。英台乃ち梁が墓前に造（いた）り、声を失ひ慟哭すれば、地忽ち開裂し、**塋**中に墜ち入る。綉裙綺襦、**蝶に化して**飛び去る。丞相謝安其事を朝に聞（きこ）し、封じて義婦の冢と為さんことを請ふ。此れ東晋永和の時の事なり。斉和帝の時、梁復た霊異を顕し、戦を助けて功有り、有司為に廟を鄞に立て、梁祝を合祀す。其の読書せし宅碧鮮庵と称す。斉の建元の間、改めて善権寺と為す。今寺後に石刻有り、「祝英台読書処」と大書す。

参考文献・参考サイト

A、『通俗編』巻三七所引『宣室志』

B、張恨水著『梁山伯与祝英台』（香港・文宗出版社、一九五四年）

＊二十一「文字的来源」によると、晋代の話で、口承で徐々にできあがったものであるが、文字に記載されたのは宋代のこと。（＊『中国文学大辞典』によると唐代から。）

C、馮志芬、莫志勤編劇『梁山伯与祝英台・粤劇』（広州・華南人民出版社、一九五四年）

＊冒頭に見えるあらすじ…文語調なので、これ自体漢文教材にできそう。

伝説在東晋穆帝的時候（公元三百六十年）、会稽（今之浙江省境）上虞地方祝家荘、有女祝英台、素有大志、向父祝公遠請求前往杭城求学、公遠為着門第家声、不允。英台用計、扮作算命先生（＊映画と違う）、将父戯弄、並且把他説服。公遠和她約法三章、准她改扮男装、和侍女人心就道。英台路過柳蔭、遇着会稽白沙崗書生梁山伯、相見之下、十分投機、遂結拝為兄弟、同往杭城求学。英台与山伯同学三年、同硯（＊同じ師に就く）共宿、感情非常親切。某日、英台替山伯縫補破衣、山伯発覚她耳有錐痕、心疑她是女子、詢問之、英台婉詞解釈、山伯便不再疑心。

三年後、公遠仮托祝母有病、修書催英台還郷。英台行時、山伯相送十八里。英台対山伯早有愛意、想在路上表明身世、但又父命難違、惟有借物賦詩、隠約致意。但山伯不能会意。後来英台只好借説将家中九妹相許与他、臨別時約定早些過訪。

英台帰家後、公遠将她許配馬家、英台反対無効。一月後、山伯偕士九来訪、英台痛訴原委、説罪在父母之命、媒妁之言、至今大好姻縁、無能結合。並立下『生不同衾、死将同穴』之誓言。山伯扶病回家、但意仍未息、命士九再向英台求方、英台所説之薬十種、皆為世上所無之物、山伯知已絶望、抱恨而死。

馬家迎親之日、英台向父要求先祭山伯、方肯上轎、公遠無奈応允。花轎来至山伯墓前、英台已盟死志、哭祭之時、適遇雷雨大作、山伯墳開、英台投身墳内。這双情侶、死後化成蝴蝶、飛翔在自由天地間。

D、喬秉黎編『中国民間故事』（上海・春江書局、一九四一年）

＊「祝英台」が収録されている。

E、銭仲連他主編『中国文学大辞典（修訂本）』（上海辞書出版社、二〇〇〇年）
＊蝶になるのは宋代以降加えられたという。

F、韓兆琦主編『中国古代文学名著人物形象辞典』（中州古籍出版社、二〇〇〇年）
＊弾詞（日本の講談に当たる）の『新編東調大双蝴蝶』では、二人が死んだ後、閻魔大王のお蔭で生き返り、命を全うした後、同じ墓に入った。その墓の周りには蝶が飛び回っていたため、周りの人は二人の化身だと言ったという話になっている。

G、路工編『梁祝故事説唱集』新一版（上海古籍出版社、一九八五年）
（＊民間文学資料叢書の一つとして、一九五五年、上海出版公司から出版されている。）
＊「伝奇」「民歌」「鼓詞」「木魚書」「弾詞」という説唱（語り物）から十五種の作品が収録されている。『新編東調大双蝴蝶』（乾隆三四年（一七六九））もある。七言の句が並んでいるので教材化できる部分があるかもしれない。
以下の民歌「梁山伯」（清・乾隆間李調元編『粤風』）は教材にできるかもしれない（十七頁）。

古時有個梁山伯、
常共英台在学堂。
同学読書同結願、
夜間同宿象牙床。

H、周静書主編『梁祝文化大観』四冊（中華書局、一九九九年・二〇〇〇年）
＊故事歌謡巻、曲芸小説巻、戯劇影視巻、学術論文巻があり、梁祝に関する研究、文献が網羅的に収録されている。
曲芸小説巻の弾詞「梁山伯与祝英台」「十八相送」に二人の以下のようなやり取りがある。

祝：双双踏出碧蘚庵、多謝梁兄送下山。眼前景物堪留恋、一路而来尽徘徊。
梁：依依難舎祝英台、別恨離愁推不開。凭它一片風光好、哪有閑情仔細看。

I、『梁山伯与祝英台』（香港・広智書局、出版年未詳）

＊学校について：周世章書館、学生は六人で寄宿しているのは梁山伯と祝英台のみである。午前中に授業が行われ、一日と十五日に詩文の試験が行われる。例えば、教師が「緑葉紅花、能邀胡蝶」と言い、それの対句を作らせるなどである（「同窓」三六頁）。答えを求められた梁山伯が「金弓銀弾、要打鴛…」と言いかけると、祝英台が制して「莫打鴛鴦」と結ぶ。（胡蝶、鴛鴦ともに二人を暗示する。）

J、銭南揚等著『名家談梁山伯与祝英台（名家談四大伝説之一）』（文化芸術、二〇〇六年）

＊周静書「梁祝“化蝶”成因及其文化意義」は、梁祝故事に元来なかった蝶になる場面がいつどのように付加されていったかを検証している（晋代に遡るという）。

K、澤田瑞穂「考説祝英台」（『中国の伝承と説話』研文出版、一九八八年）

＊澤田氏は、梁祝の墓を訪ね、以下の七絶を詠んでいる（六一～六二頁）。

「千年唱説祝英台、化蝶双飛情可哀。曽為諸生談故事、墳前今日進香来。」

L、梁祝（上虞市信息中心）

http://www.liangzhu.org/default.asp

＊祝英台の故郷とされる紹興市上虞区が作っているサイト。歴代の関係記述、戯曲、研究、音楽作品に至るまで、原文をも収録する全面的なデータベース。〔二〇一八年九月九日アクセス可〕

M、古籍中提及的上虞祝英台

2012年07月17日 15:39 上虞新聞网

http://synews.zjol.com.cn/synews/system/2012/07/17/015221631.shtml

＊関係古籍の原文が見える（ただし簡体字）。〔二〇一八年九月九日アクセス可〕

＊本稿は平成三〇年度科学研究費補助金・基盤研究C（課題番号16K04800）「普遍性と多様性を考慮した漢文教材の開発」〔研究代表者・湯城吉信〕による研究成果の一部である。

（二〇一八年九月二十七日受理）